

「感染症 広がり方と防ぎ方」

井上 栄著 中公新書 2006年12月20日発行

目に見えない病原性微生物による疾患すなわち感染症、この言葉には広く深い意味がある。国境を越えて世界中を駆け巡り伝播する地理的な広さのみならず莫大な数の対象微生物、人間とありとあらゆる動物の間に共通する病原微生物の存在の広さ、DNA/RNA といった遺伝子のレベルから公衆衛生、環境汚染まで超マクロにいたる深さ、であると言えよう。

ウイルス学、公衆衛生学の大先輩であられる井上 栄先生が中公新書から昨年出版された「感染症」を書評する機会を与えられ大変光栄と思い、簡単にお引き受けしたが、「〇〇蛇に怖じず」で、後になるほど、大きな後悔やら不安やらが絡み合った実に複雑な気持ちになってしまった。

この新書を読み終えて、最初に心に浮かんだことは、この四月から新しく微生物学を学ぶ若い研究者、コメディカルな看護師さんたちにも是非読んで貰いたいことであった。微生物を研究しようと志される方々の微生物学の知識の源は、Field's Virology や Topley and Wilson's Bacteriology 或いは日本語の色々な専門書からスタートすることと思われる。これらの専門書は、各 section ごとに深遠な深さをもって、我々に知識を与えてくれる。しかし、感染症は、前にも述べたように、限らない広さを持つ自然科学である。例えば、ひとつの疾患を考える場合に、深さだけで解決できず、むしろ広さが求められることが多々ある。また、コメディカルな人々には、何よりも感染症はどのようにして成立するのかを把握することが出発点と思われる。病原微生物によって発症することは分かっている、どのような経路が存在するのか、さらに感染経路は微生物の種類によって異なるということだけでも理解出来れば、自ずから感染経路の遮断すなわち予防の道が開けてくることになる。そのような意味からもこの「感染症」を読んでいただきたいと思った。また、専門的に微生物学を研究されている方々には、微生物のための微生物学ではない、治療、予防のための微生物学であることを再認識して頂くために、超ミクロの世界から、マクロの世界でふと深呼吸されることをお勧めする意味で読んでいただきたいと思った。

この新書にはいくつかの特徴がある。ひとつは、公衆衛生学的な観点から、副題にもあるように、感染症の拡大の

様式とそれを理解した上での予防法の確立である。二つ目は、これらの方法を確立するためには、EBM すなわち過去の感染症の事実の確証とそれに基づいた独創的な発想の構築がふんだんに駆使されていることである。三つ目は、微生物と人間との間で交錯する感染症に関わる何かを解明するユニークな持論が展開されていること、と言えよう。このようなユニークな発想による持論は、専門書では決してお目にかかることのない視点から、感染症の伝播、予防を捉えている。著者は感染症に関していくつかの仮説を立てられ、また感染症と清潔好きな日本人の感染症予防哲学を持っておられる。一般的に、欧米の科学者は仮説を立てることが得意で、先ず仮説から入り仮説を実証するための研究が行われ、核心に到達すると聞く。仮説を立てることが得意なのは、裏を返せば、実証把握を十二分に行っているという証なのである。

著者はこれまでもスギ花粉症について寄生虫感染に由来する IgE 抗体の役割にユニークな発想をされ、杉花粉症の予防にも寄生虫感染由来 IgE が有効であるというダイナミックな仮説を打ち立てられている。

さて、SARS 感染症の伝播についての仮説を取り上げてみる。中国、香港での多くの SARS 患者の発症が報じられ新興感染症の流行が世界を震撼させた頃、SARS コロナウイルスの伝播経路から、また、SARS 患者であった台湾人医師の日本での行動経路からみても、日本で SARS 感染が起こっても決して不思議ではない情勢であった。にもかかわらず、日本では一人の SARS 患者も出なかった。大流行を起こした香港や中国の事例について、二つの仮説を立てられた。一つは、最大の理由を日本語の発音の仕方が中国語とは違うという点であった。英語と中国語には有気音があり、言葉によって息が激しく吐き出される。一方、日本語には無気音として発音される場合が多く、外に息が激しく吹き出されることは少ないという。SARS の飛沫感染を考えると、感染率の違いは自明というものである。台湾人医師は日本で中国語をふんだんに使わなかっただろう。東南アジアを旅行していた日本人に中国語でなく日本語で話しかけて来ただろう。SARS 研究において、これほどダイナミックな仮説が立てられたのは、流行状況の疫学的、ウ

ウイルス学的解析，伝播様式を綿密に解析された賜物ではないだろうかと思われる。これは Lancet に素早いスピードで掲載された。二番目の仮説として，日本人の清潔さが SARS 感染を防いだ，と立てられている。香港の高層団地の SARS 発生状況を見た場合，日本の清潔さとは比べ物にならない環境であった。

ところで，この自然界には微生物が色々な形で，色々な物質に依存して存在していることは周知のことである。この依存性を絶つこと，すなわち清潔を保つこと，が感染症から身を守ることである。そのように考えると，清潔は感染症予防の最も基本的かつ最大の武器であることが分かる。著者は日本人の清潔さの由来について，歴史的に文化の変遷などについての考察から，日本人は世界一高い清潔観念を持っていると結論付けられている。この事実は日本人の感染症の発生予防の大きな要因であったことは否定できない。しかし，この清潔志向は，あくまでも病原性微生物に対しての清潔であり，無害な微生物とは共存しておくという概念が必要だと謳われている。バリ島を訪れた日本人観光客が帰国後に下痢症状等を訴え，我々の病原体検出の仕事量を増やす海外赤痢感染者は，現地の人は無症状であるにもかかわらず，日本人だけが感染して発症している事実，これは清潔環境の中で育った日本人ゆえからであるのか。

私はノロウイルスを専門にやっているのでノロウイルス感染事例を引き合いにするが，2006/2007 シーズンに見られたノロウイルス感染事例は，いままでにない大きな特徴を幾つか持っている。その一つとして，これまでノロウイ

ルス感染といえば，直ぐに生カキの喫食を考えたが，このシーズンでは調理従事者による汚染食材を原因とした集団発生が大部分であった。つまり，調理人でさえ，用便後の手洗いが不十分で，手についたノロウイルスが食材汚染に繋がったものと考えられている。これは日本人の清潔文化を逸脱した伝播経路となり，これまでの清潔感に軸ブレが生じた結果ではないだろうかと思わざるを得なくなった。

書評より遥かに軸ブレした「読書感想文」になってしまったことに，感染症の大先輩の著者に申し訳ない気持ちで一杯である。しかし，研究生活，実務の中で，何かに突き当たったら，躊躇うことなくこの「感染症」を開けることをお勧めしたい。

最後に，これはある新聞の惜別という欄の記事であるが，柔道の講道学舎常務理事中山美恵子さん(講道学舎会長 故横地治男さんのご息女)が，父から教えられた言葉として紹介されていた。

「畏敬する人をそばに置きなさい。人間は弱いから，怖い人がいないと，おごりが出たり判断に迷ったりする」

感染症を学ぶ者にとって，この「感染症」は，正に重みあるこの横地さんの言葉の実践版になるのではないだろうかと思ひ，書評の最後の締めくくりとした。

田中智之

堺市衛生研究所

〒 590-0953 堺市堺区甲斐町東 3-2-8

Tel: 072-238-1848